

初調査、研究室院生の「夏休み」

プロジェクトに過半捧げ、オフは平均5日

text_bannai



週の4日はプロジェクト三昧、1日休んで、残りはバイトと研究一。8月も半ばを迎え本格的に夏の到来を感じる今日この頃、都市デザイン研究室大学院生の夏休みの大要が、マガジン編集部によるアンケート調査で初めて明らかに

なった。調査は、8月の1ヶ月間(=約30日)、どのような活動にどれだけの割合で時間を割いたか(割く予定か)を、おおまかに記入してもらう形式で行なった。集計の結果は、右図のようになった。



圧巻の新宿P

プロジェクトの中でも、6割以上を「新宿」が占めており、回答者の夏休み全体の、およそ4割が「新宿」に費やされていることとなる。これだけのマンパワー集結は研究室史上珍しいのではないが。

旅せぬ院生

「オフ」5日中、「旅行」はわずかに1日。海外へゆく院生も1人にとどまった。「ピークを外して9月に旅行する」と言う院生は多いが、それにしても、いささか寂しい夏休みではある。

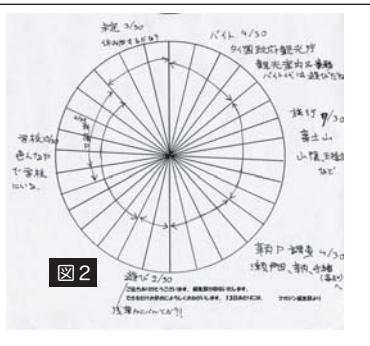
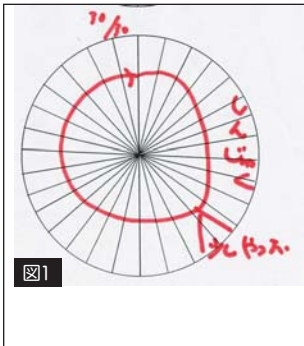
予想を上回るプロジェクト偏重型の院生生活が、結果として出た。「現場にこそ現実と真実が存する」との西村教授モットーが忠実に守られていること、研究室としての活気が高いレベルで保たれていることを、まずは評価するべきであろう。

く配されている。「プロジェクトをさぼってけしからん」という非難は、あたらない。彩りゆたかなこのような生活の背景には、事前の周到な「デザイン」があったに違いない。自分にとって、大学院における生活とは何か・何を不得どのような人間として社会へ出るのか、という大計。そのなかで、「夏」というゆたかな時間をいかに按分して、前進とリフレッシュを実現するのか。

しかしながら、図1のような回答票を見るとときに索漠の念禁じ得ないのは評子のみではあるまい。4時間のミーティング後に書かれた歪んだ円と但し書きには、時代錯誤「モーレツリーマン」的な疲れの色が濃く滲んでいる。projectという語が持つ「前向き」さは、ここにはない。

場当たりの享楽に耽っては、その後、当然の帰結として泥縄的にプロジェクト作業に呻吟する一。飽きもせずにこのループに浸かる評子に「ライフ・デザイン」の必要且つ喫緊なることを教えてくれた、示唆深い調査であった。

図2を見よう。バイトと、プロジェクト、旅行、遊びがバランスよ



1年生・なつやすみ作文コンクール

入選2作

左/9合目からの御来光
中/富士山頂にて、ボンサン
右/奥田、落合第二地区・崖線からの眺望を確かめる



夏だ！富士登山の季節だ！
一年四谷花園組
ボンサン ウィチエンブライト

というわけで、行ってきました。実に僕にとつて富士登山は今回で2回目になるのです。9時から登り始めたので、標準ペースで行けば日の出に間に合う筈でしたが、人間渋滞が7合目から始まり、結局御来光は9合目で迎える羽目になりました。それでも雲海に浮かんだ朝日の輝きは何とも言えない位素晴らしいものでした。

今回始めて体験したお鉢めぐりはまた大変なもので、アップダウンに富むコースでした。空気の薄さのせいか、登る度に心拍数が異常に上がって、身の危険さえ感じました。なんとか生き残ってよかったです。

富士山の下りは非常につまらない道で、2時間以上延々と砂利道が続いていました。しかも、気をつけなければ踏み違えて捻挫することもあります。これから登る人は是非下りのつまらなさも覚悟しておくといえましょう。

富士山は登るより、眺める山なのだ、一回登る価値はあります。しかし、2度登ることは決してしないように！

あたしの夏休み
一年落合日組 奥田 絢子

今年からデザイン研に入った私は、欲張りにも京浜・喜多方・新宿と3つのプロジェクトを掛け持ちし、充実した毎日を送っています。今一番時間を割いているのは新宿。現地に何度も足を運び、地域の景観の特徴とは何か、どうしたらよりよい景観を築けるのかと、頭をひねっています。京浜・喜多方でも、新宿で磨いた「まちを見る目」を応用して将来像づくりに向かっています。

今までの夏休みの思い出といえば、ジュリー前に強行した屋久島旅行。都市の中の自然を考えたいと思っていた私にとって、「ああ、人は自然の中に帰ってくるこんなに生き生きするんだな」と実感させてくれた大切な時間でした。

これからの夏休みでは、プロジェクトの合間を縫って、まち・建築・公園など、日本の良い空間をたくさん見て、自分が本当にいたい場所・つくりたい場所への感性を磨きたいなと思っています。

景観法勉強会報告

次代の景観になう若手集う

03 岡村 祐

8月6日(日)の昼下がり、都市デザイン研究室にて、「景観法・景観計画のセールスマン」こと国土交通省景観室の山本慎一郎氏(都市工08)を迎え、景観計画勉強会が開催されました。中島助手、現役の院生6名に加え、08の關(山手総研)、内山(日建設計)の両氏が参加しました。

山本氏による景観法の概説の後、策定済みの16の景観計画を順にレビューし、生活美の創造を謳った秦野市、眺望景観の保全を重視した大津市など創意あふれる各自治体の取り組みに注目が集まりました。また、關氏からは、仕事で携わっている神奈川県や横浜市による景観行政の取り組みが紹介されました。学生からは、「景観計画の目標年次はあるのか」、「県の計画を市の計画にどのように反映させるか」、「景観重要建造物の指定を受けた場合の実質的なメリットは何か」などの質問が出ました。

貴重な場を設けて頂いた山本氏に改めて感謝の意を表します。

椽内吉胤生地踏査ルポ

酒井・中島コンビ、盛岡をゆく

今春研究生修了OB・現農学部研究生 酒井憲一



盛岡さんさ踊りが終わっても、街や草木はカンカン照り32度に燃え立っていた。8月7日午前10時2分、駅頭に立ったのは「椽内のまちあるき追体験と生地探訪」の中島直人助手と小生。5月に都市美の先駆者椽内吉胤について東京農大でコラボ講演をしたふたりである。

まず椽内ゆかりの岩手日報社を訪問、吉田報道部長と懇談し、椽内再評価を建言した。

次いで大正15年11月岩手日報主催の「椽内都市計画臨地講演会」のコースを、中島助手用意の昭和3年9月発行地図と現状を重ね合わせて進む。同紙が「實地に就いて懇切を極めた椽内氏の都市計画講演 雨を突いて熱心な聴講者」の見出しで大きく報じた道筋だ。

椽内生地を確定するには、中島助手の地図早読み取りと小生が入手していた現場の見取り図が磁石のように効いた。午後2時に立った加賀野「文化小路」の生地400坪跡は、早くに売却され、新しい住宅地になっていたが、中津川遊歩道からの眺望は一幅の絵だった。

なお、小生はそのあと羽後本荘まで足を伸ばし、終戦の年、椽内が夫人の実家に疎開して亡くなった表尾崎町界隈を調査した。



写真上/椽内生家跡に立つ中島助手(左)と酒井
写真下/中津川越しに椽内生地を写真に収める酒井

新宿は燃えているか

景観プロジェクト、灼熱の第2クール

4月から6月まで、空前の規模で研究室を動かした、あの新宿プロジェクト(新宿区景観計画策定基礎調査)が、夏休みに入って再始動。第1クールで取り組んだ筆筈、落合第一地域の、それぞれ隣接地域にあたる四谷、落合第二地域を対象とした、8月下旬までの夏季短期決戦である。

プロジェクト発足以来の密着取材体制を組んでいる本誌が、第1クールにも増す勢いで吹き荒れる「新宿」模様を伝える。

怒涛の10時間ミーティング

8月12日(土)、正午に始まった四谷地域チーム・ミーティングは、各自が自分の担当地域について作成した「景観構造図」を中心に議論、終了は6時過ぎ。中島、野原両助手が宣言した「10分」休憩ののち、落合第二ミーティングスタート。終わったころには、時計は10時を回っていた。



▲四谷チームのミーティング風景。毎回消費される紙の量もすさまじい

流行りは「早朝まちあるき」



▲落合第二チームのまちあるき。このように、日が出ていなければ楽なのだけれど…

猛暑の折、日中の現地調査は相当消耗する。ならば、始発で現地へ赴いて6時ごろから歩き始め、陽射しの強くなるまで(遅くとも午前中)に歩ききってしまう、というのが「早朝まちあるき」の考え方。8月5日ごろ、四谷チームで初めて実施する者が現れると、一気に流行した。

text_bannai

変身! 仙道秘書、主役熱演

公演「花山ララの奇譚」観劇記

M2 坂内 良明

当研究室の誇る清純派女優、仙道美江秘書の晴れ舞台一。七夕飾りもにぎにぎし中央線・阿佐ヶ谷の地に、西村教授・五十嵐佳子技官はじめ、研究室メンバー7名が応援に馳せ参じた。

劇団「40CARAT」公演楽日の8月7日、擬・古民家風の内装がちょっぴりデザ研ごころをくすぐる小劇場・阿佐ヶ谷ザムザ。主演女優・仙道は、満を持して開演20分、自慢の黒髪まぶしく、内省的うつむきもて登場。いでたちこそ(M2女子院生曰く)「普段着」めきつつも、腹から出す声のツヤ、堂々たるセリフ回しと立ちまわりは、日ごろ寡黙をもってなる「秘書」のそれではなく、「看板女優」の賞禄たっぷりだった。

公演はねて記念撮影を済ませた応援団一同は、駅前ダイニングバーにて西村先生を囲んで劇の余韻をたのしむ。先生と奥様の深い絆をうかがいつつ、ハーフ&ハーフビールに咽喉を潤した、真夏の夜のよき夢でありました。



女優・仙道を囲んで、研究室応援団

編集後記 text_bannai

「リビア、なんで僕がゼロなんだ!?!」「僕は、ゼロなんかじゃない…」。女優仙道のセリフに心揺さぶられたのは、もちろん、気品ある秘書と「リビア」のミスマッチのせいのみではない。合点して、決意する。ゼロのままでは終わらせない。「ゼロならざる」他のひととの積を、なんとかしてゼロでなくしたい。逃げを繰り返しながら、のべつ「疲れた」とへたりこみながら、それでも研究室にすがり、ぶら下がるモチベーションは、ひとえにそれなのだ。都市の縮図たる劇場にて、客席に降る役者の唾と汗は、「ゼロならざる」ひとの生きざまの証しとして、酷暑まちあるき時の日光よりも強く、直載に肌を射した。自分がからきし駄目なのは、能力がないからなのか、それとも情熱が足りないのか、多分両方?…などと問うことはひとまずさて置き、納へ。